教觀双用法華經安心深敬讃講話

網脇龍妙

日蓮宗の説教は多くが、宗祖の御伝記を有難く説く、これは誠に結構で、そうあるべきで、宗祖が生きた法華経なんだから今後も一層力を入れ、益々力をかけて欲しい。が然し法義の段になると、勧持品的折伏時代のまゝが多く、現代としては兎角徹底を欠き、殊に一番大切な安心の段になると説者自らが確たる安心を握つているのか、甚だ疑はしいのが多く、雷霹が好いから説教家になつていると云ふ観があり、信徒も又一向安心に重きを置いていぬように見える。

宗門人が、確たる法華経の眞実の安心を持たぬ所から、多くが迷信に陥り、兎角驕慢心が強く、茲に不軽品の「増上慢比丘比丘尼、優婆塞、優婆夷」となり、「増上慢比丘、有大勢力」となつて、益々混乱を來すのである。素々時代を指導し得る、眞実の確たる物を握つていぬのであつて、譬へば方角を知らぬ者が、団体旅行の統卒をして、愈々道に迷い、困まつているようなものである。

宗教は世の機関車である。社会、国家、人類の客車を引いて安全地に走るのが役目である。機関車が役に立たぬ所から、あられもない方向に走つて、遂に機関車自らも、客車も、千仞の谿底に陥つて、三千年の歴史を台無しにし、万劫悔いて及ばぬ紅涙十丈の哀しみを見るに到るのである。それでも尚責任を覚らず、耻を知らぬとあつては、最早や言語同断である。

私は曾て、十数年前かと思ふが、野上彌生の書いた短編小説を汽車の中で読んで、欧羅巴と亜細亞の堺か、或は希臘の山上かに、戰争好きの魔神の何とかゞ、最後に捕はれて、鉄索でぐるぐる巻きにされて、永遠に鉄の大きな杭に縛られている像があるとを知つて、日本が斯くなる時が來るのではないかと、寂しい感を懐いたことがあつた。シベリヤ出兵、満洲事変から今度の戰争等に対しても、宗教家にも責任はある。矢張り機関車が役に立たなかつたからだと思う。

私は十八歳から五十六歳まで三十九年間の長い間、猛烈な持病の喘息に悩んだ結果、昭和七年に正月から小一年間、佛天に祈請して、その年の十二月三日に靈感を得て、蒲団を着たまゝの、極めて簡單な運動を案出し、それで完全に喘息を征服し、他にも勧めて、喘息のみならず種々の病に用いて、折々奇蹟的の効果を現はした所から、深敬運動と名づけて、社会に普及したいと思ふていた際に、大阪天王寺附近椎寺に住んでいた岡左馬太氏に頼まれて、此の運動に併せて唱ふる歌を作つたのであります。茲に掲げる深敬讃がそれであります。これは気が向いて、ふと即坐に作つたので、又運動に併せるためでありますか

ら、ざつとしたものでありますが、私の法華経信仰の安心を、卒直に現はしているのであります。三十分間位での説明で、大体納得出來るようにしたのであります。然し詳しく説く段になると、何十坐の説教にでもなるのであります。

深敬讃

一

己が体は多宝塔
親子互に深敬し
夫婦互に拜むべし

己が体は多宝塔の一句で、諸法実相、一念三千の佛智即ち釈尊の悟道を得心させるのであります。雪中の塚原三昧堂で、阿佛坊上人が即座に改宗したのが、実に「宝塔乍ら阿佛房」の法門で、方便仮設の十万億土の阿彌陀佛よりも、宇宙の宝を聚めて出來ている阿佛房あなたの体の中にとそ、日蓮は如來様が拜めますよと謂はれて、ハツと驚いて覚り、即座に数珠を切つたと想像されるのであります。

迹門の三周説法に依り、舍利弗を筆頭に、佛弟子が悉く成佛の記別を受けた時に、一同が我が身の大宝塔、即ち我が毘樓遮那眞実身、宇宙遍満の本体を拜んだのである。法華迹門の観心の大法門、佛教哲学の極致が実に「己が体は多宝塔」の一句に籠つているのである。此れを敎え此れを覚らせれば、即ち親子夫婦互に自然に拜み合い、其所には眞実美しい道義が現はれ、驕慢の態度が、自づと影を潜めるのであります。

二

他の体は神の宮
師弟互に深敬し
隣人互に拜むべし

私は一を書いた時にふと側にあつた其の日の山梨日日新聞に眼を落した途端に、その三面記事に、此の縣下東山梨郡某村で補習夜学の生徒が、大勢で不意に電燈を消して、模範校長と云はれる先生を、袋叩きにしたことが載つているので、これはと思つて、即坐に神道や基督教とも通ずるように、「他の体は神の宮」と書いたのであります。師は先生、弟は生徒であります隣人は兎角仲が悪い例が多いから特に深敬精神で、お互に天国に居る思いを起させるのであります。

三

瞋恚は地獄の焔にて
血汐は沸すのみならず
壽を縮むる毒を出す

十界互具の法門を、地獄の一つで覚らせるのであります。「一念地獄の心を起す時は、即ち法界皆獄なり」で、我が色心が宇宙遍満のものであり、肉体は我が心の現はれであるから、心が地獄の火を燃やす時、肉体が焼け焦げるだけでなく、その人にとつては、実に宇宙全体が火となつて燃ゆる、これが地獄で

ある。憤怒すれば、髓から毒が出て、壽命を縮める。これは立腹し易い人間が、大概短命であることが何よりの証拠である。

私は昭和十年十一月に、阪大医大講堂での第八回日本獨学会大会に、映画應用で、この深敬運動を発表して、自ら説明それも法衣姿でしたのでありますが、その時会の希望で、この歌もといふことで写しましたが、お医者さん達が、怒れば毒を出すことは、医学上からも、慥に間違いは無いと賛成しました。

四

慈愛は佛の萠芽にて
家庭の円満のみならず
命を長むる藥なり

此れは前の地獄の反対で、説明するまでも無いと思います。仁者は命長しとは儒教でも教えている。悟れば藥師如來は自己の中におはしまし、その藥壜は自己の骨の髓の中に在ると思へば善しいのであります。不愉快で長く居れば、自然病気になる反対に、絶えず有難い有難いの心で居れば、持っている病気も自然に癒ることも眞理でなければならぬ。信仰で病気を治することを、強ち迷信とすることは間違であろう。

五

不軽菩薩の芳蹟踐みて
経歴多年の行積まば
過去の積悪消滅し
清淨自在の身となりて
壽命を増益したる上
即身成佛致すべし

此れは、不軽品の「不軽菩薩、能忍受之、其罪畢已、臨命終時、得聞此経、六根清淨、神通力故、増益壽命」の文を、宗祖の「日蓮は不軽の芳蹟を継げるものなり」のお言葉に併せたのであります。法華経の現代に威力を発揮するのは実に此の段にあるのでありまして、此れは口先の説教では駄目で、不軽色読が、日蓮聖人の現代に於ける本筋で、此れを実行している宗団は栄へ、然らざる宗団は衰滅することは必然と思はれる。新興教団の盛大になるのも一概には云へぬが、中にはたしかに善く遣つていると思へるのもあります。

終りに、此の深敬讃の含んでいるものは、現代の最も重大なる問題にも、関連すると思はれるのでありまして、此れに依つて世界の眞の平和を築き、人類を恐るべき戦禍から救はねばならぬと思ふのであります。

（昭和二十七年十月二十三日認）

× × × × × × ×